

エピソード1 美少年を誘拐してみた

「ん、んんう……」

弱々しい呻き声を上げながら春村 結城（はるむら ゆうき）はやっと目を覚ます。彼は目を瞬かせて周囲を見渡した。そこは薄暗い部屋の中。照明の類はなく、小さな天窓から僅かな光が差すのみであった。家具やカーペットなど人間味を持つ代物は悉く駆逐されており、木で造られた簡素な椅子とテーブルが一つずつだけ部屋の中央にある。部屋自体が石でできているようで、温かみは欠片もなくその床はひどく冷たかった。まるで牢屋のよう、というか牢屋そのものであるように思えた。

周囲の状況を把握した結城はとりあえず立ち上がろうとする。しかし、いくら身を振れども体が全く動かない。そこで彼はやっと、自分の体が頑丈な縄によって束縛されているということに気づいた。上半身、そして、太ももの辺りに何重にも縄が巻かれていて、正座の状態から抜け出すことのできないようになっていた。しかも、ブリーフ一丁で他の衣類が剥ぎ取られている。

結城は動揺しながらも、焦燥感を抑えつつ冷静に自分の置かれている状況を分析し始める。しかし、そのための判断材料はあまりに少なく、彼の置かれている環境から疑問点の解決を図るのは、パーツの欠損しているプラスチック模型を説明書なしで完成させるようなものであった。その不確定要素は彼を不安に陥れた。彼はこれから自分がどうなるのかを憂いながらその身を震わせた。

それから数分後、ガチャリと部屋の鉄扉が開いた。

「あ、目が覚めたのね」

そこから現れたのは信じられないほどの美少女であった。艶やかに舞う漆黒の黒髪、血色のいい肌、目を見張るほどの美貌、完璧な黄金比を辿るスタイル、それは結城が今までに出会った女性の中で最も美人だと思える女の子であった。不覚にも、彼の心臓は大きく高鳴った。

「うふふ……」

美少女は妖艶な微笑みを浮かべながら婉然たる動作で歩み寄る。結城は怯えと恍惚の中で美少女に訊ねる。

「だ、だ……だれ、ですか？」

結城の問いかけに、美少女は口を開く。

「私？ 私はねえ、小野原 来夢っていうの。これからよろしくね？」

「よろしくって……」「ここは、いったい……」

「ここは家の離れのちよっとした小屋だよ。ふふ、監禁にはびったりだと思わない？」

「かんきん……？」

「そう。あなたを閉じ込めて、ここに監禁するの」

笑顔を決やさずにそう言う来夢に、結城は言い知れぬ恐怖を覚えた。

「い、いや……僕、こんなところいたくないよ。僕、家に帰らないとお母さん心配するし……だから、ここから出してよお……」

結城は涙で瞳を潤ませながら懇願するが、来夢の様子は依然変わらず、怯える結城を微笑みながら見つめるのみであった。その微笑みの真意を読み取ることのできない結城は、さらに恐怖心を喚起され、とうとう本当に泣き出してしまった。

「うっ、う、ううううっ……」

「あらあらどうしたの？ お姉さんが怖いのか？」

「いやあ、怖いよお」

「よしよろしくし、怖くないわよろしく」

来夢は結城の傍にしゃがみ込むと優しく頭を撫で、彼のことをあやす。しかし、結城の涙は一向に止まなかった。手を縛られているがために結城は涙を拭うことができず、流れた涙と鼻水は彼の頬を伝って彼のブリーフに落下する。点々とブリーフに染みが生まれた。

「全く、しょうがないなあ。……ほら、顔を上げて？」

「うぐっ、ううっ、な、なに……？」

結城はボロボロと号泣しながら顔を上げる。

すると、突然。

「……んっ」

何の前触れもなく、来夢は結城の唇を奪った。

「んんっ!?!」

驚愕の声を上げた結城は突然のキスにそのまま固まる。時の流れが停止する。頭の中が真っ白になってしまう。

「ん……んん……」

目を閉じて来夢はさらに唇を寄せる。貪り尽くすかのように情熱的な接吻を施す。唇と唇の触れ合う音が妖艶な音色を奏でていた。

「ん、んんっ……んあ……」

恋愛経験すらなかった結城にとってキスとはまさに未知の領域で、それが意味することはなんとなくでしか理解していなかったものの、その心地良さは彼の価値観を丸ごと塗り替えるほどのものであった。来夢の唇はわずかに湿っており、とてもとても柔らかかった。今でかつてない感触に彼は訳も分からず酔いしれた。

結城は無抵抗のまま来夢のキスに溺れていく。すでに彼の瞳から涙は引いていた。茹で上がったかのように頬は朱色に染まっており、粒のような汗が噴き出す。

「……んむ、んっ……ちゅぶ……」

結城が早くも籠絡されたことを確信した来夢は彼の心をさらに絡めとるために、より激しく唇を擦り寄せながらピンク色の艶やかな舌を伸ばす。結城の淫らな触手はゆっくりと結城の口内に侵入し、蛇のように彼の舌と絡み合う。来夢は身動きの取れない結城を一方的に犯していく。そのテクニクは結城にとって効果抜群であった。

「ん……んんっ……んあっ」

結城は目をトロンとさせながら甘い声を漏らす。彼の思考はすでに凍結され、恐怖や怯えといった感情もいつしか放逐されていた。なされるがままに快楽の渦に飲み込まれていく。結城は自分の中の何かが弾けそうになるのを感じた。今までに感じたことのないような奇妙な疼きを覚えたのだ。彼のペニスはムクムクと膨れ上がっていく。それに合わせて白いブリーフが勾配の激しい弧を描いた。

「んう……ぶはあ……」

結城の盛り上がったブリーフを見て、来夢はディープキスをやっと止める。そして、ブリーフの上から彼のペニスの軌跡を人差し指でなぞった。

「あらら、お子ちゃまチンポ勃起させちゃって……そんなに気持ち良かったの？」

「ん、んあ……」ペニスの刺激に結城は喘ぎ声を漏らす。

「ん？ ここがいいのかしら？ どーお？」

「うっ、くっ、ああっ」

「んふっ、いやらしいのねえ。ほら、もう我慢汁出てきちゃった……」

溢れ出したカウパー液はブリーフにさらなる染みを形成させ、来夢の指にぬるりと付着した。彼女は糸を引くそれを結城に見せつけ、妖

しげに微笑む。

結城は頬を朱色に染めて、来夢をうっとり見つめる。

「おねえさん……」と結城は言う。

「ん？ なにかしら？」

「おねえさん、もっと……もったときもちよくなりたい……。おねえさん……おねえさん……ちゅう……ちゅうして、お願い……。おねえさん……」

股間を揺すりながら甘える結城に、来夢は思わず涎を垂らす。性的興奮に顔を真っ赤にさせながら幼き性欲を発露するその美少年の姿は、可愛さの極致と言っても過言ではなく、彼女のハートはそれだけで驚きにさせられてしまったのだ。

来夢は今すぐに結城を襲って己の変態欲求の赴くままに彼をぐちゃぐちゃにしていまいたくなくなったが、幾度かの深呼吸と数回の自問自答により本能を抑制し、分泌された唾液を一先ず飲み込んだ。そして、彼女は結城の体を縛り上げる縄を解いていく。もはや、彼が逃げ出すことはないだろうと判断したためだ。

「分かった。もっと気持ちよくさせてあげるからね。その前に、この縄解いちゃうからちよつと待っててね」

「うん……まつ……」

そう言って結城は縄を解く来夢に体を預ける。来夢から発せられる柑橘系のいい匂いが彼の鼻をくすぐった。彼は鼻を鳴らしてその匂いを嗅ぐ。そして、その芳香に顔を綻ばせた。

やがて、結城の体を束縛していた縄は全て解け、息絶えた蛇のように地面に横たわった。彼を縛るものはもうなくなった。

しかし、にもかかわらず、結城はそこから逃げ出そうとはしなかった。心理的な縄が彼を雁字搦めにしていたからだ。

「おねえさん……ちゅう……ちゅうしたい……。ねえ……」

結城は来夢に抱きつきキスを要求する。

しかし、結城の唇に触れたのは来夢の人差し指で、彼はそのまま押し返されてしまった。来夢の拒絶に結城は再び涙を溜める。

「ちゅう……してくれないの……？ やだよ……ちゅうしてよお……」

「大丈夫、泣く必要はないわ。今度はチューよりもっと気持ちいい」としてあげるから」

「……ホント……？ ……ちゅうより……？」

「ええ、そうよ。……ふふっ」

恍惚を笑みとして表出した来夢は結城のブリーフを脱がしにかかる。ゴムの部分に指を引つ掛け、少しずつ下ろしていく。

結城も下半身を晒すことには些かの躊躇があるようであったが、キスより上位となる快樂を味わうためならばこの程度の恥は許容して然るべきと考え、恥辱に頬を染めながらも来夢の行為に協力した。

やがて、ブリーフは膝下までずり落ち、結城のペニスが顔を出した。彼のペニスは小さく、細く、また皮を被っており、非常に可愛らしいものであった。陰毛の一本すら生えていなかった。

来夢は結城のお子様ペニスを眺め、目を輝かせる。

「あら、おチンポ。ぷっくーってなっちゃってねえ」

「恥ずかしいよう。あんまりじろじろ見ないでよお……」

「うふふ、おチンポ。こんなに大きくしちゃって、どうしたのかな？」

「わ、分からないよお。うう、さっきからチンチンなんか変なの。なんかぐるぐるーってなってるの。それで、なんかすっごい熱いの。ねえ、おねえさん、これって病気なの？ 僕、死んじゃうの？」

結城は少し不安そうに訊ねる。

「……あなた、もしかして射精したことないの？」

「じゃせー？ じゃせーってなに？」

「白のおしっこがびゆるびゆるーって出ちゃうこと」

「？ おしっこは黄色いよ？」首を傾げる結城。

「ふふっ、そう、あなた、まだ精通してないのね？ それじゃあ……」
来夢は結城のペニスを握る。「私が、気持ちよ〜く射精させてあげるからね？」

来夢はゆっくりと結城のペニスを扱き始めた。

「うっ、ふうあっ、あっ！」

結城は咄嗟に目を瞑って喘ぎ声を上げる。オナニーすら未体験であった彼にとってその刺激は得も言われぬ気持ちよさであった。来夢のひんやりとした指先が彼のペニスをこねくり回す。少し扱いただけで彼の包茎ペニスの先から我慢汁が溢れ出す。彼のペニスはカウパー液でぬるぬるとなり、いやらしい音を奏で始める。

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ——

「さ、おチンポ剥き剥きしちゃいませうね〜」

「い、いやっ、だめえ。あんっ」

ペニスをくちゆくちゆと扱きつつ、来夢はペニスの先端を摘み、余った皮を剥いていく。痛みと快感の相乗が間断なく彼を穿つ。結城は全身を悶えさせながらそれら刺激に必死に耐える。彼の体内の疼きはさらに大きくなっていく。

やがて、ペニスの包皮はつるりと剥け、結城の真っ赤な亀頭が顔を出した。それは刺激を求めるようにひくひく痙攣していた。

「かわい〜。おチンポ剥き剥きできたね〜」

「んうっ、あっあっ、ひっううう〜」

「それっ、ぐりぐりぐりぐり〜」

来夢は左の手の平を亀頭に当て、手首の捻りによって強く強く擦っていく。敏感な亀頭を擦りに擦り、飛び上がりそうになるほどの強烈な刺激を与えていく。右手は依然として結城の竿部分を扱っており、両手による快樂責めはさらなる苛烈を極め、彼を絶頂へと奔走させる。結城は堕ちていく。来夢の快樂責めに堕ちていく。

結城が大きく鳴いているのを聞き、来夢はいやらしい笑みを浮かべた。

「どう？ きもちいい？ おチンポくちゆくちゆされるのきもちいい？」

「ああっ！ だ、だめ、だめえ！ お、おかひく、んあっ！ なっちやうよお！」

「もう、きゃんきゃんうるさいのねえ。そんなあなたには……そらっ、これでも嗅いでなさい？」

「んむっ!?!」

来夢は履いていた靴下を脱ぎ、左手で結城の鼻に押し当てた。その靴下からは洗剤の匂いと女の子の甘い匂いが混じり、そこに汗の匂いをスパイスとして付け加えたような芳醇な香りが醸し出されていた。それは瞬く間に結城をメロメロにし、彼の性的興奮をさらに喚起させた。

結城は自分の手で靴下を鼻に押し当て、うっとりしながらその甘い匂いを嗅ぐ。その様子を見た来夢は息を荒げながら扱くスピードを加速させていく。

「ほら？ どう？ おチンポどう？」

「おねえさん……んあっ、おねえさん……チンチン、熱いよお。頭おかしくなっちゃう……」

「いいのよ。私に体をゆだねてね。ほおら、もっとシコシコしてあげるからねえ」

来夢は結城の耳元で甘く囁きながら、剥きたてで敏感な亀頭の部分を重点的に責めていく。手の平で擦るだけではなく、人差し指と親指で摘み、ぐりぐりと捻っていく。あまりに強烈な刺激に結城は腰を震わせながら悶える。刺激と呼応するかのように彼のペニスは著しく痙攣し、我慢汁を大量に漏らす。

竿部分のゆるやかな刺激、亀頭の強烈な刺激、靴下の甘い香り、来夢の囁き声——脳の構成物質がバラバラとなって崩れ落ちるような感覚、逸脱への奇妙な背徳感、はち切れそうな性的興奮——結城の感じた疼きはもうすぐそこまで迫っていた。

「あつ、あつ、あん、んあつ、お、おねえさん……だめえ……なんか……なんか出ちやうよお」結城は目に涙を浮かべて言う。

「なんか？ なんかってなあに？」

「熱いの……熱いの出ちやう……チンチンから漏れちやうよお……ん、んんううう！」

「ふふっ、いいのよ。出しちゃいなさい？ せーしいっぱい出しちゃいなさい？ ぴゅっぴゅっぴゅっって、おチンポミルク撒き散らすの。分かった？ ほら、ぴゅっぴゅっぴゅっうううう！」

「う、う、ああああああつ……！」

亀頭の部分をさらに強く抓られ、一際強烈な刺激を受けた結城のペニスは大きく大きく跳ね上がる。その瞬間——

びゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっ

「……………！！」

結城の小さなペニスからその許容量を遥かに超える量の精液が凄まじい勢いで噴射される。何度も何度も脈打ちながら、亀頭から精液を撒き散らす。彼の白濁色の子種は来夢の手に、服に、顔に付着し、青臭い香りを醸し始める。

ペニスの暴走に恐怖を覚えた結城は射精を止めようとペニスに力を入れる。しかし、その行為には何の意味もなく、むしろ射精管に渦巻く精液をさらに押し出す結果となった。彼は腰をガクガクと震わせながら射精する。それに伴う快感も尋常ならざるもので、彼の頭の中は

「そう、あなたもっと射精したいのね？」

「うん……しゃせー……したい。チンチン、くちゅくちゅして……」

「ふふ、分かったわ。今度はもっとすごいことしてあげる……」

そう言って結城に微笑みかけると、来夢はするすると服を脱ぎ始めた。制服のリボンを解き、ワイシャツを脱ぎ、果てはブラジャーまで外してしまう。淫らな仕草で身に着けていた衣類を脱ぎ捨て、やがて、脱衣の果てに姿を現したのは来夢のGカップの乳房であった。

まるで陶器のような純白の艶を纏ったそれはわずかな汗を帯びながら妖しげに揺れ、結城の視線を釘付けにしてしまう。彼の射精に興奮しているためか、来夢の乳首は固く勃起していた。

来夢は見せつけるかのように自分の豊満な胸を揉みしだく。

「どーう？ 私のおっぱい、大きいでしょう？」

「あ、あ、あ……」

「ほら、むぎゅう……」

来夢は結城を再び抱き寄せると彼を自分の胸に埋めてしまう。彼女の乳房からは甘酸っぱい芳香が香り、忽ちの内に結城を虜にしてしまった。来夢の胸に魅了された結城は自らそれに埋まりながら必死に鼻を鳴らす。そして、その小さな両手で彼女の胸の柔らかさを堪能する。

過度の興奮に脳を蕩けさせた結城は当然の如くペニスを勃起させる。再び生まれた体内の疼きに彼は腰をピコピコと震わせながら発情していた。結城は胸から少し顔を上げると、切なげな表情で来夢を見つめた。

「おねえさん……チンチンが、また……」

「そうね、ぷくーってなっちゃったわねえ」

「ぴゅっぴゅしたい、ぴゅっぴゅしたいよお……おねえさん……おねえさん……」

「え〜どうしよっかな〜」

「いぢわる……いぢわりしないでよ……しゃせーしたいよ……」

結城は目を潤ませながら来夢を見る。その光景に来夢は大量に唾液を分泌させる。

「しょうが、ない、わねえ全く。甘えん坊さんなんだから。いいわ。さつきみたいに射精させてあげる。うふふ……」

来夢は一步結城から離れると、股間の前で屈み込み、彼のペニスをその豊満な胸で挟んでしまった。そして、そのままゆっくりと乳房を

